

東方キリスト教世界とロシア

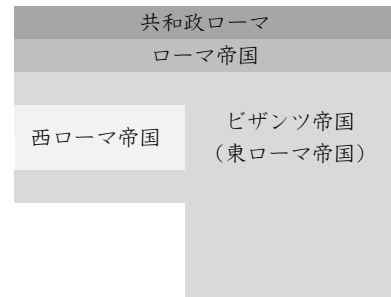
1. はじめに

「東方キリスト教」は、正しくは「東方正教」またはたんに「正教」と言い、英語では一般的に The Eastern Orthodox Church 「東方正教（会）」と言う。「東方」という言葉が付されているのは、カトリックやプロテスタントが西欧で広がったのに対して、正教が中近東、バルカン半島、ロシア等に広がったためである。ちなみに、東方正教会自身は、「東方正教会」という言い方を認めても、自らの教会をたんに「正教会」と呼んでいる¹。

したがって、「東方キリスト教世界」も本来は「東方正教世界」と言うべきである。ここで言う「世界」は、「社会」ないし「文化圏」と同義である。つまり、「東方キリスト教世界」とは、正教を信仰している人々が多数派となって暮らしている社会、ないし正教文化が強い影響力を持っている地域という意味である。現代では、それらの地域は、主としてバルカン半島および旧ソ連の一部（アルメニア、ウクライナ、ギリシア、グルジア、セルビア、ブルガリア、ペラルーシ、マケドニア、モルドヴァ、ルーマニア、ロシア）である。しかし、歴史的には、「東方キリスト教世界」は、バルカン半島および旧ソ連の一部にとどまらず、現在、一般に「イスラム文化圏」、「中東」、「アラブ世界」といった言葉で呼ばれている地域をも含む、より広汎な地域である²。

2. ビザンツ帝国（東ローマ帝国）の歴史

- 前 509 年 古代ローマの共和政の始まり。
- 前 27 年 ローマ帝国、帝政へ移行。
- 330 年 ローマ帝国、コンスタンティノープルに遷都。
- 395 年 西ローマ帝国の成立。首都はミラノ。
- 476 年 西ローマ帝国の崩壊。
- 550 年頃 ローマ帝国ユスティアヌス帝、地中海世界を再統一。
- 800 年 ローマ教皇レオ 3 世、フランク王国カール大帝（シャルルマーニュ）に帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言。
- 1453 年 コンスタンティノープル陥落。ローマ帝国の崩壊。



3. キリスト教の発展

- 前 27 年 ローマ帝国、帝政へ。
- 30 年頃 イエスの処刑。この後、キリスト教おこる。
- 301 年頃 アルメニア、キリスト教を国教とする。
- 313 年 ローマ帝国、キリスト教を公認。この頃のキリスト教徒は人口の 10%程度と推定される。
- 325 年 ニカイア（第 1 回）公会議。「父なる神」、「子なるキリスト」、「聖霊」の三者関係について、「父と子の同一実体」説、「聖霊は父から発する」との解釈を提起。
- 350 年頃 グルジア、キリスト教を国教とする。
- 381 年 コンスタンティノープル（第 2 回）公会議、ニカイア公会議の解釈を確認。「子」の従属性を主張するアリウス派を異端とする。
- 392 年 ローマ帝国のテオドシウス 1 世、キリスト教を国教とする。
- 431 年 エフェソス（第 3 回）公会議、「信条」の改変を禁ずる。
- この頃 教会制度が確立される。使徒ペテロが殉教したローマの教会、次いで首都コンスタンティノープルの教会が高い地位を占めた。
- 451 年 カルケドン（第 4 回）公会議、キリストにおける「神性」と「人性」の関係を「混合・変化・分割・分離しない」と

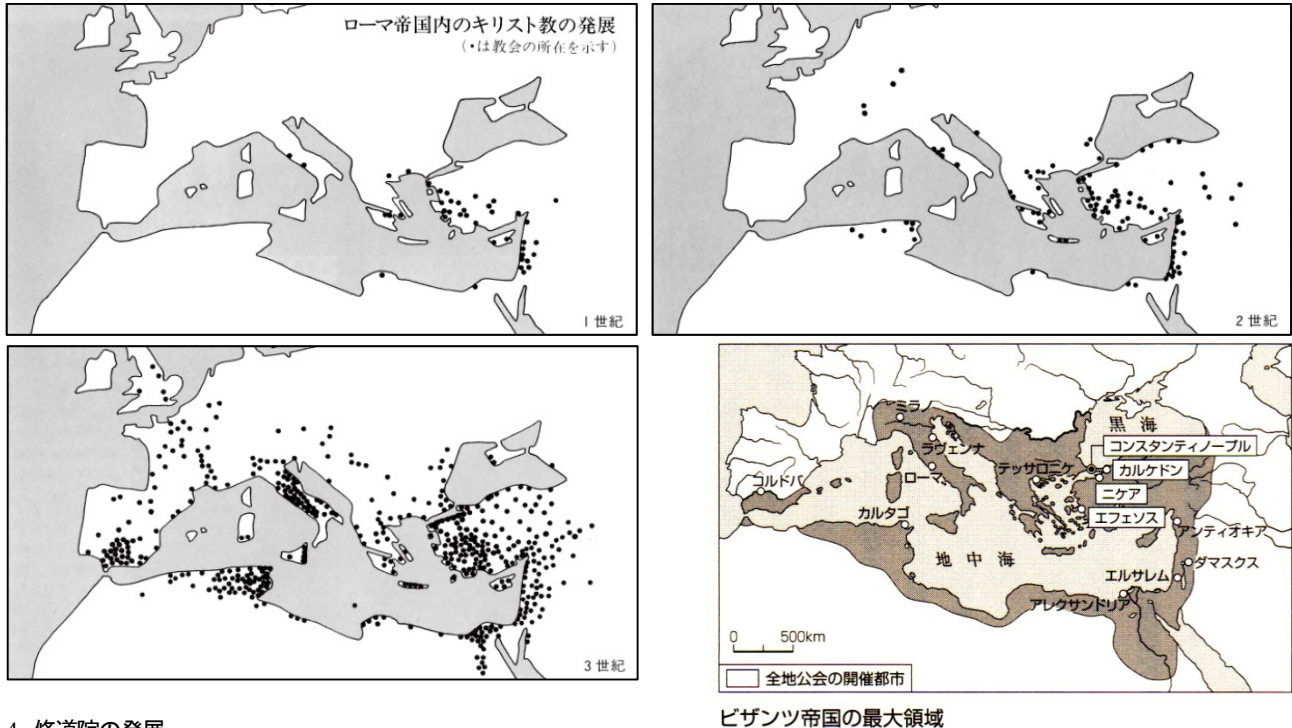
¹ 日本正教会ホームページでは以下のような説明がなされている。「正教会は東方正教会とも呼ばれます。ローマ・カトリック教会やプロテスタント諸教会が西ヨーロッパを中心に広がったのに対し、キリスト教が生まれた中近東を中心に、ギリシャ、東欧から、ロシアへ広がりました」。(<http://www.orthodoxjapan.jp/seikyokukai.html>)

² 参考文献：森安達也『ビジュアル版世界の歴史 9 ビザンツとロシア・東欧』（講談社 1985）；廣岡正久『宗教の世界史 10 キリスト教の歴史 3 東方正教会・東方諸教会』（山川出版社、2013）。

する「カルケドン信条」を作成。キリストは単一の性を持つとする単性論³、キリストの性は一つではなく、神性と人性との二つの性に分離されるとし、人性においてキリストを生んだマリアを神の母（テオトコス）であることを否定するネストリウス派⁴を退けた。

553 年 コンスタンティノープル（第 5 回）公会議。

680 年 コンスタンティノープル（第 6 回）公会議。キリスト単意論を異端と宣告。4 人のコンスタンティノープル総主教とローマ教皇ホノリウスが異端として断罪される。



4. 修道院の発展

ビザンツ帝国の教会では、聖職者の妻帯は一般的で、聖職志願者は助祭（正教会では輔祭）の段階で結婚し、司祭になってからの結婚または再婚は認められなかった。主教以上の高位聖職者は独身の修道司祭から登用された。キリスト教の修道制は 3 世紀エジプトが起源とされる。4 世紀、カッパドキアで共住制修道院の基礎が築かれ、6 世紀にシナイ半島の聖カテリナ修道院、ギリシア北部アトス山の修道院群が成立。活発化するのは 10 世紀以降。

5. イコノクラスム（聖像破壊運動）

730 年 シリア出身の東ローマ皇帝レオン 3 世は、イコン崇敬を禁じる勅令（聖像禁止令）を発令。

旧約聖書のモーセの十戒の「偶像禁止」が根拠。

787 年 レオン 3 世の孫レオン 4 世の皇后エイレーネー（アテネ出身）が主宰したニカイア（第 7 回）公会議、イコン崇敬の正統性を再確認。

800 年 ローマ教皇レオ 3 世、フランク王国カール大帝（シャルルマーニュ）に帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言。

聖像禁止令はビザンツ帝国の小アジア側や一部の聖職者・知識人には支持されたが、ヘレニズム文化（古代ギリシア文化）の伝統の残る首都コンスタンティノープルや帝国の西欧側の国民、イコンの製作に携わっていた修道士達の反発を招いた。聖像をゲルマン人への布教に用いていたローマ教会も、この決定を非難、コンスタンティノープルへの税の支払いを停止、これにより既に 4 世紀から文化的・政治的に亀裂が生じつつあった東ローマ皇帝・コンスタンティノポリス総主教とローマ教皇の関係は決定的に悪化した。

6. アルメニア正教会、グルジア正教会、エチオピア正教会

アルメニア正教会（使徒教会）、グルジア正教会、エチオピア正教会など、ビザンツ帝国に隣接する帝国の外部でも、それぞれ独特の発展を遂げていった東方正教会がある。

キリスト教が東西に分裂し、宗教改革を経て変貌したカトリックやプロテスタントと異なり、初期キリスト教の伝統を現代まで保持している貴重な文化遺産でもある。

6.1. アルメニア正教会（使徒教会）

アルメニアは、301 年頃、キリスト教を国教とし、親ローマ、親ビザンツ、反ペルシアの傾向を強めた。

キリスト教教義論争については、451 年のカルケドン（第 4 回）公会議に戦乱のため代表を送ることができず、449 年のエフェソス会議⁵の決議である単性論派の立場を受け入れた。

³ シリア正教会（ヤコブ派）、アルメニア使徒教会、コプト正教会（エジプトのアレクサンドリア総主教を頂点とする）、エチオピア正教会が、外部からは単性論派とされている。

⁴ シルクロードを経て中国に伝えられ、「景教」と呼ばれたのはネストリウス派である。

⁵ 単性論派に好意的な皇帝テオドシウス 2 世の庇護のもと、アレクサンドリア主教ディオスコロスが単性論を決議した公会議。しかし、451 年のカルケドン公会議でエフェソス公会議の決議を無効とし、エフェソス公会議も公会議の資格を取り消され、「強奪会議」と呼ばれるようになった。

6.2. グルジア正教会

グルジアは、350年頃、キリスト教を国教とし、一時期、隣国のアルメニア正教会とともに単性論の立場をとったが、7世紀初頭にカルケドン派に転じた。

7. スラブ世界の成立と東方正教会の土着化

7.1. 東西両教会の分離

858年 学者・官僚のフォティオスが聖職者の経験なくコンスタンティノープル総主教となる。

863年 ローマ教皇、フォティオスを破門（ローマ教会では「離教」）。

西方教会では、三位一体のうちの「聖霊」が「子からも」（フィリオクエ）発出するとの考えが強く、コンスタンティノープル総主教は、「信条」の改変を禁じた431年のエフェソス（第3回）公会議の規程を盾にこれを否定し、東西両教会の対立が強まった。

1054年 7月16日、ローマ教皇の使節としてコンスタンティノープルを訪問した枢機卿フンベルトゥス、信条からのフィリオクエの削除⁶、聖職者の妻帯の慣行等を根拠に、首都コンスタンティノープルの聖ソフィア教会に、コンスタンティノープル総主教ケラリオスの破門を提出。

ケラリオスは、逆に教皇の使節を破門。東西両教会が分離。

1453年 コンスタンティノープル陥落。ローマ帝国の崩壊。

7.2. 東方正教会の土着化

ビザンツ帝国の弱体化、バルカン半島やロシアなどスラブ人の居住する地域での諸民族の国家の台頭とともに、東方正教会は、スラブ系諸民族の国家宗教ないし民族宗教として「土着化」の歴史を歩んでいく。

早くから正教を信仰していたギリシア人、アルメニア人、グルジア人のほか、この時期に正教を受け入れたのは、東スラブ族（現在のロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人）、南スラブ族（ブルガリア人、セルビア人、マケドニア人）、その他の諸民族としてルーマニア人（現在のモルドヴァ人を含む）らであった。

なお、バルカン半島の北方に居住する西スラブ族（現在のポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人、クロアチア人、スロヴェニア人）およびハンガリー人（マジャール人）は初期の段階で正教の影響を受けているが、やがて西欧のフランク王国との関係を重視して、カトリックを受け入れていった。

南スラブ族は、ビザンツ帝国の崩壊後、オスマン帝国の支配下で、正教の信仰を守っていくことになる。

他方、9世紀以降、東スラブ族の中でも、ルーシ人（のちのロシア人）が台頭、13～14世紀のモンゴルの支配を経て、ロシア帝国が成立、ビザンツ帝国の後裔を唱えることとなる。

8. 東方正教会のキリスト教観

日本正教会のホームページから⁷

イイスス・ハリストス（イエス・キリストの日本正教会訳）の十字架刑による死と三日目の復活という出来事を「神による人間の救い」として直接体験し、その証人として世界中に伝えたお弟子たちのことを特別に「使徒」と呼びます。正教会はこの使徒たちの信仰と彼らから始まった教会のありかたを、唯一正しく受け継いできたと自負します。

正教会は中世西ヨーロッパの「スコラ神学」や近代の宗教改革とも無縁でした。キリスト教会は現在は多くの教派に分裂していますが、中世のある時期までは「一つの聖なる公なる使徒の教会」（ニケヤ・コンスタンティノープル信仰告白）としてほぼ一致していました。正教会はこの東西教会が一つにまとまっていた時代に、五世紀間にわたって合計七回開催された全教会の代表者たちによる会議（「全地公会議」325年～787年）で確認された教義や教会組織のあり方、教会規則、さらに使徒たちの時代にまでさかのぼることのできる様々な伝統を切れ目なく忠実に守り続けています。正教会と他の諸教会が「分裂」したのではなく、正教会から他の諸教会が離れていったというのが「教会分裂」の真相です。

教義的には、人間の理解をこえた事柄については謙虚に沈黙するという古代教会の指導者（聖師父）たちの姿勢を受け継ぎ、後にローマ・カトリック教会が付け加えた「煉獄」・「マリヤの無原罪懐胎」・「ローマ教皇の不可誤謬性」といった「新しい教え」は一切しりぞけます。またプロテスタントのルターやカルヴァンらのように「聖書のみが信仰の源泉」だとも「救われる者も減る者もあらかじめ神は予定している」とも決して言いません。かたくなと見えるほどに、古代教会で全教会が確認した教義を、「付け加えることも」「差し引くこともなく」守っています。

教会組織も、ローマ・カトリック教会のようにローマ教皇をリーダーとして全世界の教会がきちんと一枚岩に組織されたものではなく、各地域の独立教会がゆるやかに手を結びあっているにすぎません。しかし強力なリーダーシップがないからと言って、聖書解釈の違いや教会のあり方への理解の違いから無数の教派に分裂してきたプロテスタント諸教会とは異なり、正教信仰と使徒たちの教会の姿を各教会がすすんで分かち合うことによって「正教会」としての一致を保ち続けてきました。

9. キエフ・ルーシ

5世紀以降、スロヴァキア付近のスラブ族の一部が東に移動し、東スラブ族（のちのロシア人・ウクライナ人・ベラルーシ人）が形成された。

9世紀末、東スラブ族の国、ルーシ Русь が歴史に登場する。ルーシは、スカンジナビア半島・バルト海と黒海・ビザンツ帝国（首都コンスタンティノープル）とを結ぶノルマン人の交易・通商ルートに位置していた。

この交易・通商ルートは、北から、バルト海→ネヴァ川→ラドガ湖→ヴォルホフ川→（陸路）→ドニエプル川→黒海というルートで、ヴォルホフ川上流からドニエプル川上流までのあいだに、比較的平坦で短い陸路があるだけで、あとは水運がある。このルート上のヴォルホフ川中流にノヴゴロド、ドニエプル川中流にキエフというルーシの二大都市が建設された。

『原書年代記』⁸によると、ルーシの人々がノルマン人（ルーシではヴァリャーク人と呼んだ）に対して「ルーシは広大で豊かだが争

⁶ これはカルケドン信条に対する誤解に基づいている。

⁷ <http://www.orthodoxjapan.jp/seikyokai.html>

いが絶えないので、ここに来て統治してほしい」と要請し、ノルマン人のリュージク（在位 862-879 年）がノヴゴロドに王朝を創建したとされるので、ルーシの最初の王朝はリュージク朝と呼ばれる。2 代目の王、オレク將軍（在位 879-912 年）がキエフを攻略し、キエフ・ルーシ（キエフ公国）の歴史が始まった。

10. キエフ・ルーシによるキリスト教の国教化

988 年 キエフ・ルーシ、キリスト教を国教とする。ウラジーミル大公（ウラジーミル 1 世、在位 980-1015 年）、洗礼を受け、ビザンツ帝国皇帝バシレイオス 2 世の妹アンナを妻とする。

11 世紀前半 スラブ語典の導入。

1223 年 モンゴル軍、ルーシ南部に侵入後、撤退。

1237 年 モンゴル軍、ルーシ東部から侵入し、モンゴル（キプチャク・ハン国）によるルーシ支配が始まる。

キプチャク・ハン国の支配者は、少数のモンゴル人と多数のチュルク系諸民族により構成されていたが、ルーシでは彼らをタタール人と総称し、彼らによる支配を「タタールのくびき *татарское иго*」と呼んでいる。モンゴルの支配は、ロシア史にとって以下のような大きな意味を持つ。

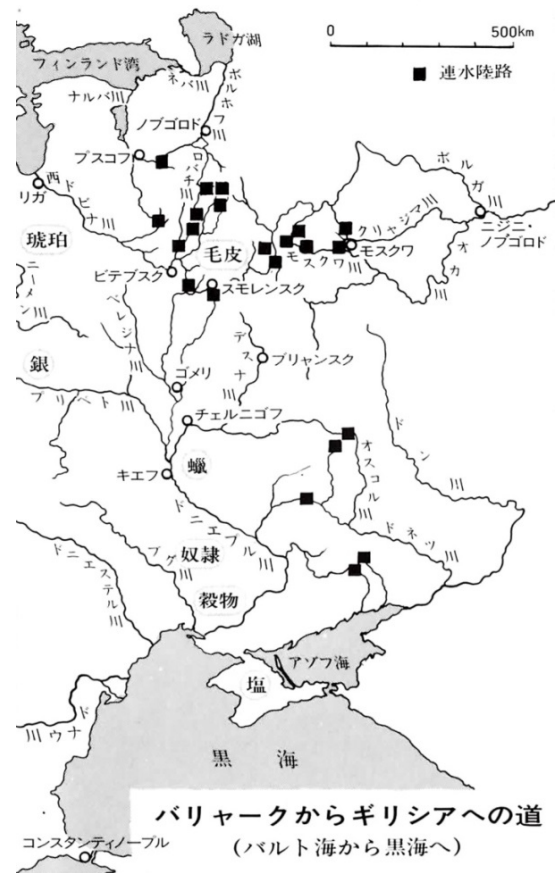
①ルーシは、アジアとヨーロッパをまたぐユーラシア帝国の支配下の一部となった。

②ルーシは、モンゴルの支配をその強大な軍事力によって強制されただけでなく、生き残りのために自らその支配を受容することを選択した。すなわちルーシは、ドイツ騎士団の支配下に入り、モンゴルに徹底抗戦する道もあったが、ドイツ騎士団によるローマ教会への服従の要求を嫌い、宗教的に寛容なモンゴルによる支配を選択した。

③パリに比肩するほど発展したキエフが衰退した。

④ルーシの西部・南部が離脱し、ベラルーシ・ウクライナの萌芽が生まれた。

⑤ルーシの諸公国（とくにウラジーミル大公国、モスクワ公国）の専制が強化された。



11. モスクワ国家の形成からロシアへ

1310 年 キエフ府主教座、モスクワに移転。

1380 年 モスクワ公国軍、クリコヴォの戦いで、キプチャク汗国軍に大勝。

1439 年 オスマン帝国の攻撃にさらされたビザンツ帝国がローマに支援を求めると、ローマは東方教会の服従を求め、フィレンツェ公会議で東西教会の合同が決定されたが、東方教会の多くは反発。モスクワのイヴァン 3 世（在位 1462-1505 年）もこれに反発、ギリシアから送られた府主教を合同に賛成しているとして廃し、モスクワ総主教の独立を達成。

1453 年 ビザンツ帝国が滅亡。

1472 年 ローマ教会はイヴァン 3 世を懐柔するため、ビザンツ帝国最後の皇帝コンスタンティヌス 11 世の姪ゾエ（ソフィア）をイヴァン 3 世に嫁入りさせるが、かえってイヴァン 3 世はこの結婚によりビザンツ帝国の正当な後継者を名乗ることになり、「ツァーリ *Царь*」（ビザンツ帝国皇帝の称号カエサルのロシア語）と称し、ビザンツ帝国の双頭の鷲の紋章をモスクワ公国の国章として採用。モスクワは「第三のローマ」を自称するようになる。

1598 年 イヴァン 4 世の息子フョードルの死によって、リュージク朝は断絶。

1613 年 動乱（*Смутное время*）の時代（1604-13 年）を経て、貴族会議でロマノフ家からツァーリが選出され、ロマノフ朝が始まる。

12. 教会の政権への従属

1652 年 総主教に選出されたニーコン *Никон* は、教会典礼の改革に着手したが、民衆の反発を呼び、新しい儀礼を拒否した分離派 *раскольник* が登場し、教会は分裂して弱体化し、教会の政権への従属が強まる。

1721 年 ピョートル 1 世（大帝。在位 1682-1725 年）はスウェーデンとの北方戦争（1700-21 年）に勝利し、1721 年のニスタット条約によりバルト海への出口を獲得し、この間、サンクト・ペテルブルクの建設が進められた（1703-12 年。）

13. ロシア正教会の発展

「第三のローマ」を自認するロシア皇帝は、西方教会の誤りを正し、正教を広めることで世界を救済するというメシア思想を持つようになり、これがロシアの対外膨張主義の遠因であるとする説があるが、これは冷戦期のバイアスに基づく説と考えられ、そのように考えるべき証拠はない。

実際、幕末における宣教師ニコライの来日による日本における正教の布教も、ニコライ自身の日本語習得、日本人宣教師の育成を始めとする土着化に基づいて実施されており、ロシア帝国の膨張主義とは無縁であった。

1917 年 11 月のボリシェヴィキ政権の成立により、ロシア正教会は弱体化したが、第 2 次世界大戦中の愛国主義の強まりとともに正教会も復活し、ソ連崩壊後は教会の復興・再建も相次いでいる。

⁸ 『原初年代』は、およそ 850 年から 1110 年までのキエフ・ルーシの歴史について記された年代記である。初版は 1113 年。『過ぎし年月の物語』とも呼ばれる。